

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成 24 年 6 月 18 日現在

機関番号：33503

研究種目：若手研究（B）

研究期間：2009～2011

課題番号：21730569

研究課題名（和文）

フィリピンセブ島スラム街における虐待予防プログラムの長期的効果研究

研究課題名（英文） Study on the long-term results of an abuse prevention program in a slum in Cebu Island, Philippines.

研究代表者

太田 沙緒梨（OTA SAORI）

山梨英和大学・人間文化学部・非常勤講師

研究者番号：90440544

研究成果の概要（和文）：フィリピン都市部にある一貧困地区で、2005年から実践されてきた不適切な養育の予防を目指した親教育プログラムの中長期的評価を行った。その結果、アウトカムは5年後も維持され、実践が難しいとされたスキルも現地の生活環境に応用されていた。さらに、現地の社会文化的背景に応じたインパクトが認められた。これらの結果から、子どものメンタルヘルスサービスが十分でない途上国での、子育て支援のための心理教育的アプローチの可能性と今後の展望について検討した。

研究成果の概要（英文）：A new psycho-educational program has been in place since 2005 with the aim of preventing unfit child-rearing practices in an impoverished urban area in the Philippines. A medium- and long-term evaluation of this program yielded the following results: outcomes have been maintained for 5 years, skills that were believed to be difficult to implement have been put into practice in the local environment, and an impact on the local sociocultural circumstances has been observed. On the basis of these results, we investigated the potential for and future prospects of psycho-educational approaches to child-rearing support in developing countries, where mental health services for children are insufficient.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2009年度	800,000	240,000	1,040,000
2010年度	600,000	180,000	780,000
2011年度	400,000	120,000	520,000
総計	1,800,000	540,000	2,340,000

研究分野：社会科学

科研費の分科・細目：心理学・臨床心理学

キーワード：心理教育プログラム、中長期的評価、途上国支援

1. 研究開始当初の背景

欧米では、貧困による子どもの発達のリスクを軽減するための早期介入に関して、例えば国家の政策であるアメリカのヘッドスタートプログラムをはじめとした就学前の乳幼児とその養育者に向けたプログラムが、数多く開発されている。特に経済的に困窮していることによって子どもの学業成績の不振

や不登校、成人での貧困などの問題の予防に Perry Preschool Project、子どもの虐待の予防と健康促進を目的とした、Parental/Early Infancy Project が行われ、長期的な効果が認められている（Olds 1997；Berreuta-Clement、Schweinhart、Barnett、Epstein、& Weikart 1984）。

一方、慢性的な貧困下にある途上国では、

ECD (Early Childhood Education) という子どもの包括的な発達支援が注目され、これまでの先進国での研究知見が応用されている。

しかしながら、長期的な効果が確認されたプログラムをアジアなど他の地域に適用するには限界がある。例えば、Sundburgら(1995)は、欧米で開発されたプログラムをそのまま他の文化圏に適用するのではなく、その地域の文化的背景、資源、その国の社会的・政治的構造などに適したものとなるような努力が必要であると指摘している。

以上の背景から、研究代表者はフィリピンセブ島のスラム街において、子どもの早期発達支援プロジェクトに携わり、アクションリサーチの手法を用いて特に養育者に対する不適切な養育予防の心理教育プログラムとしてペアレンティング・プログラムの作成および評価を行ってきた。その結果、“鞭で叩く”などの体罰を持ちいたしつけの使用頻度が統計的に有意に減少し、“誉める”“抱きしめる”などのポジティブな養育スキルの頻度が有意に増加するというアウトカムが得られた。しかし、日本では、プログラムによって獲得されたポジティブな養育スキルは維持されるが、使用が難しいものは維持されていなかったという報告がなされている(坂田、2006)。子育ては文化に方向づけられた実践である。そのため、体罰を用いたしつけやDVなどの深刻な問題が存在する当該フィールドにおいては、アウトカムの維持は困難であることが予想された。そこで、実践された心理教育プログラムが、当該フィールドにおいてどのような影響を与えているのか、中長期的な効果を検討することによって、途上国支援における心理教育プログラムの可能性を検討することができると思われる。

2. 研究の目的

本研究は、途上国支援における心理教育プログラムの可能性を検討することを目指したものである。具体的には、当該フィールドでの不適切な養育の予防を目的としたペアレンティング・プログラムの中長期的な効果の検討をアウトカムの維持とインパクトの観点から行う。

3. 研究の方法

(1) プログラムの概要

地域アセスメント並びにニーズアセスメントの結果をもとに作成された8カ月全8セッションの心理教育プログラムである。ニーズ調査によって現地側と共有されたことは、現地の養育者は、“子どもは愛すべき存在である”という価値観を持っているが、“愛情を示す方法”を学んでいないため、子どもを誉めることは少なく、体罰を用いがちである

こと、これらの養育スタイルは世代間伝達されていることである。

このプログラムは、Play Age Group (以下PAGと略)と呼ばれる、当該フィールドのカウンターパートが独自に運営するインフォーマルな幼児教育施設に奨学生として通う3-6歳児の養育者に提供されている。奨学生になれるのは、原則1家庭1名のみである。運営スタッフは、教師経験者が講師兼ファシリテーターとなり、PAG教師がアシスタントとなった。

プログラムの目的は、不適切な養育の予防であり、養育者の動機づけには、従来のやり方を批判するのではなく、養育者の直接的なニーズである子どもを効果的にしつける方法を学ぶ機会とした。具体的には、理解しやすい一般的なペアレント・トレーニングの養育スキルの学習を重視した内容となっている(表1)。また、家庭での宿題並びにPAGのプログラムと連動させ、忙しい中でも日常的に子どもを意識できるような仕組みを作るように工夫した。さらに、ハイリスクな養育者だけを取り出してケアするのではなく、養育者のメンタルヘルスのケアのための育児の悩みを共有するシェアリングを設けた(図1)。

表1 プログラムの内容

	テーマ	注
#0	家族会:プログラムを知る	2006年~
#1	行動を3つに分ける	
#2	増やしたい行動	
#3	減らしたい行動	
#4	協力を引き出す	
#5	限界設定①	
#6	限界設定②	
#7	まとめの会: 個別プランの作成	
—	誉めあうワーク	2007年~

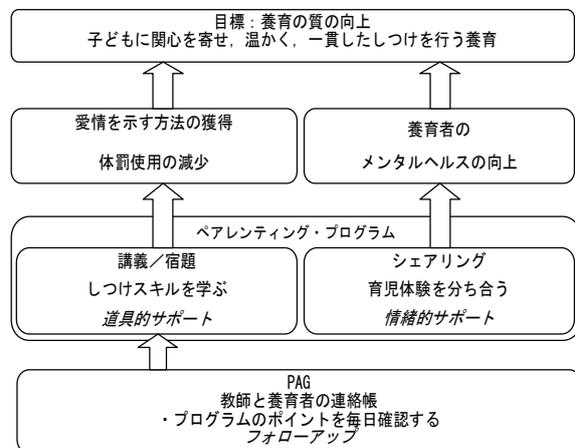


図1 ペアレンティング・プログラムの構造

プログラムは、2005年から継続して行われ、1クール毎に、プログラムの改良を意図した形成的評価を行い、軽微な修正を重ねてきた。

(2) 中長期的評価

① 予備的調査

目的：2005年から実施された形成的評価の再分析を行い、本プログラムが不適切な養育予防というねらいに即したものであったかの確認、並びに次年度の調査項目の検討。

手続き：過去5年分のプログラム実施前後で収集された67名データの再分析を実施。

分析内容：①養育行動（7項目）：National Survey of Family and Household(2005)で用いられたしつけに関する4項目に「どのくらい子どものことが理解できないと思うことがありますか」「どのくらい子どものことについて家族と相談することができますか」の3項目を加えて作成した。②メンタルヘルス（10項目）：SDS（Zung, 1965）から、身体症状を中心に10項目を選んだ。

② アウトカムの維持の検討

目的：プログラムで学習された養育スキルがどの程度実践されているか明らかにすること。

手続き：2011年2-3月に、2005年～2010年のプログラム参加者107名に対する調査協力依頼をカウンターパートを通じて行い、同意の得られた59名に対して、現地語による半構造化面接を行った。

調査内容：8つスキルの使用頻度（「毎日」～「全くない」の4件法）の、最近の子どもの困った行動場面と養育者の対応方法の自由記述、タイムアウトの実践等を尋ねる項目を独自に作成した。

(3) インパクトの検討

目的：当該フィールドの社会文化的背景・資源を活かしたものであったかという観点からプログラムのインパクトを検討すること。

手続き：2011年11月に、アウトカムの維持の調査結果のフィードバックをもとに、質問項目を作成し、運営スタッフへの半構造化面接を行った。

質問内容：PAG奨学生の同胞への影響、近隣住民への影響、プログラムの自発的発展等

4. 研究成果

(1) 予備的調査

分析対象は、プログラムに5回以上参加し、事前事後調査質問票の全2回について欠損値のない67名である。

① 養育行動：養育行動尺度の各項目について、正規性が確認できな

ったためノンパラメトリック検定のWilcoxonの符号付順位検定を用いて検討した。結果を表2に示す。

結果より、本プログラムの実施頻度は、標準的なペアレント・トレーニングのプログラムよりも低いにも関わらず、養育行動の改善に一定の効果が得られた。従って、不適切な養育予防への本プログラムの効果が確認された。この背景には、本プログラムが、就学前施設を拠点とし、プログラムの講師とPAGの教師の協働によってコミュニケーション・ノートと連動したことも影響を与えたと考えられた。

表2 養育行動に対するプログラムの効果

養育行動項目		N	Mean	Z
1.どのくらい子どもを怒鳴りつけますか？	前	67	2.85	-51 ^{ns}
	後	67	2.78	
2.どのくらい子どもを叩きますか？	前	67	2.54	-2.67**
	後	67	2.19	前>後
3.どのくらい子どもを誉めますか	前	67	1.9	-2.69**
	後	66	1.36	前>後
4.どのくらい子どもを抱きしめますか？	前	67	1.16	-54 ^{ns}
	後	67	1.1	
5.どのくらい子どもの気質を扱いにくいと感じますか？	前	67	3.07	-2.79**
	後	67	2.69	前>後
6.どのくらい子どものことを理解できないと感じますか？	前	67	2.69	-2.81**
	後	67	2.33	前>後
7.どのくらい子どもの問題を家族で話し合いますか？	前	67	1.51	-1.88 [†]
	後	67	1.27	前>後

注1：太字は逆転項目として処理、注2：**p<.01、*p<.05、†p<.05

②メンタルヘルス：事前のメンタルヘルスのリスク別にみたメンタルヘルス得点に対する効果を検討するため、事前のメンタルヘルスのリスクをグループ化した。グループ化するにあたり、メンタルヘルス尺度の元となったSDSのカットオフポイントを参考に、メンタルヘルス得点の19点以下を「良好群」、20~24点を「リスク中程度群」、25点以上を「リスク高群」の3群に分けた（以後MH3群と記す）。正規性が確認されたため、被験者内要因（測定時期2回）×被験者間要因（MH3群）の2元配置の分散分析を行ったところ、被験者内要因の主効果（F（1, 64）=36.55、p<.01）、被験者間要因の主効果（F（2, 64）=59.87、p<.01）、並びに交互作用が認められた（F（2, 64）=51.45、p<.01）。

表3 メンタルヘルスに対するプログラムの効果

	MH3群	N	測定時期と検定結果						測定時期の単純主効果	
			実施前		3群の		実施後			3群の単純主効果
			Mean	SD	単純主効果	Mean	SD	単純主効果		
MH得点	良好	27	17.22	1.78	良好<リスク中	19.37	2.2	n.s	前<後**	
	リスク中	23	21.91	1.41	良好<リスク高	19.48	2.31		前>後**	
	リスク高	17	26.35	1.32	リスク中<リスク高	20.53	2.69		前>後**	

交互作用が認められたため、単純主効果の検定による事後検定を行った。その結果、MH3群全てにおける測定時期の単純主効果（良好群： $F(1, 64) = 18.39, p < .01$ ；リスク中群： $F(1, 64) = 20.13, p < .01$ ；リスク高群： $F(1, 64) = 85.11, p < .01$ ）及び測定時期におけるMH3群の単純主効果が認められた。

以上より、養育者のメンタルヘルスのリスクの高い人々では、メンタルヘルスが改善したことが示された。一方で、リスク低群は、有意に得点は上昇したものの、事後のメンタルヘルス得点は、カットオフポイントを下回る結果であった。これは、本プログラムが、事前のメンタルヘルスのリスクの低減に貢献したことが示唆される。しかしながら、参加者のほとんどは、子どもが奨学生となった初年度にこのプログラムを受けていることから、こうした外的要因がプログラムの要因よりも養育者をエンパワメントし、メンタルヘルスの向上に影響を与えていることが推測された。そこで、アウトカムの維持の指標からは除外することが適切であると考えられた。

(2) アウトカムの維持の検討

2010年にペアレンティング・プログラムに参加した59名である（内訳：2005年度10名、2006年度1名、2007年度5名、2008年度10名、2009年度10名、2010年度23名）。分析には2006年度を除く58名のデータを使用した。

① スキルの実践頻度

本プログラムで最も重視された2つのスキルの実践頻度に関する結果を図3及び図4に示す。

プログラムで扱った8つのスキルは、どの年度の参加者においても、比較的良好に使用されており、全く使用していないと答えた回答者はいなかった。“誉める／Praising”が最もどの参加者群においても使用頻度が高い結果となった。以上より、アウトカムが維持されていることが見出された（図3）。

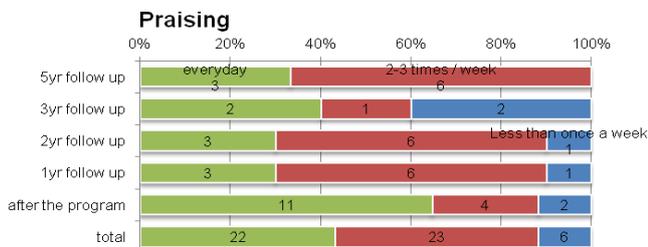


図3 Praising スキルの実践度

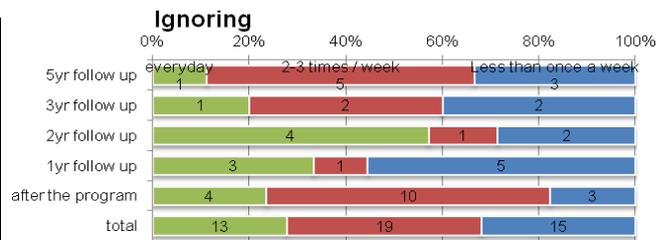


図4 Ignoring スキルの実践度

② 子どもの困った場面の対応

最近の子どもの対応に困った場面をあげてもらい、そのときの養育者の感情・考え・対応について尋ね、回答を分類した。結果を図5～図7に示す。

子どもの対応に困ったエピソードは、子どもの自己中心的な行動、きょうだいゲンカがほとんどであった。特に、その時の考えは、子どもへの対応についての言及が6割以上を占めていた。例えば、「叩きたいと思う」「子どもを正し、理解させなくては」などである。次に、「これは問題だと思う」「子どもは間違っている」等の子どもの行動の判断、「子どもは変わる」等、大雑把ながらも子どもの発達の見通しに触れた養育者も存在した。一方で、なぜ子どもがそのような行動を取るのかという子どもの意図や感情について触れた養育者は皆無であった。

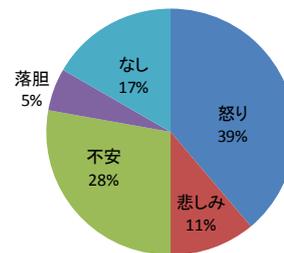


図5 その時の感情

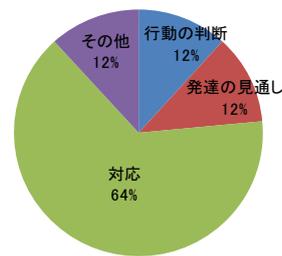


図6 その時の考え

実際の対応は、なぜその行動が望ましくないのか、その理由を説明すると答えた養育者が半数近くを占めた。叩くことを考えたと思った養育者のうち、実際にそれを行動に移した者は、半数以下であり、ほとんどは、叩いた後で、落ち着いて子どもに事情を説明していることに言及していた。

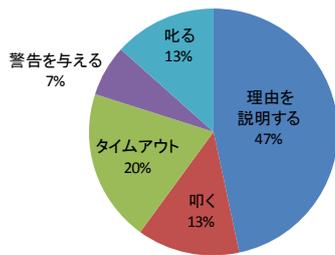


図7 その時の対応

「タイムアウト」や「警告を与える」も、プログラムで学習したスキルであり、生活の中で活かされている様子が伺われた。

③ タイムアウトの応用

形成的評価で家の狭さ、家族数の多さから課題とされたタイムアウトの実践状況について尋ねた結果、2005年度の参加者においても現在も約8割の養育者が実施していた。タイムアウトを有効に使用する工夫として、約9割の養育者が親子間でのルール作りとその共有に言及し、中にはそれを夫婦間でも共有していることを答えた養育者が1割であったが存在した。

タイムアウトを行う場所は、たとえ実質一部屋しかない家でも、ある程度仕切られた静かなスペースという観点から、階段の上と下、調理場など、それぞれの家庭で工夫されていた。

(3) インパクトの検討

運営スタッフへの半構造化面接から、得られた結果を図示したものが図8である。赤色の矢印は、PAGの直接的効果、青色がインパクトと考えられたものである。

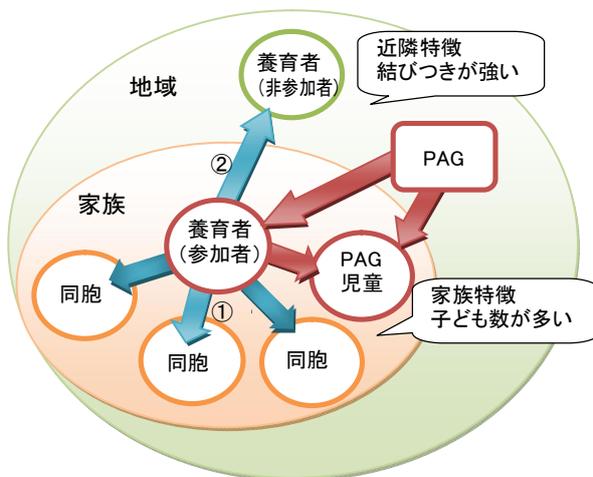


図8 プログラムのインパクト

PAG 奨学生以外の同胞に対しても、プログラムで学んだスキルが使われていることが語られた。この地域は、子ども数が多いことが特徴である。就学前教育を受けることができる奨学生となる子どもは家庭にたった一人でも、一人の養育者に対する心理教育を行うことによって、他の多くの同胞に対してもその効果が波及することが確認された(矢印①)。

さらに、運営スタッフからも予想をしていなかったことに、近隣住民らが子どもに対して体罰を行っている場面にプログラム参加者が遭遇すると、参加者が、体罰はよくない行為であることを教えていることが語られた。全ての参加者が一様に近隣住民に対するこうした啓発的行為を行っているわけではないが、プログラムのインパクトとして共有された(矢印②)。

また、研究代表者らが提案してきたプログラムを地域家庭へと拡大すべく、運営スタッフらが、プログラムの提供ができる地域リーダーの養成を試みていることが語られた。運営スタッフらは、プログラムを修了した参加者が、その後も毎年実施されるこのプログラムに参加することを独自に奨励していた。こうした独自の取り組みの背景には、何度も繰り返し参加するような意欲の高い参加者から、地域リーダー候補者を選び、将来的にリーダー養成を行うねらいがあるとのことであった(矢印②)。

(4) 途上国支援への心理教育の可能性

途上国では、慢性的な貧困による心理的ストレスが高く、養育者が子どもとの関わりについて思いを馳せる余裕はないのが現実である。さらに、子どものメンタルヘルスに関する専門家がいないところが多い。こうした中で行われた本研究の心理教育プログラムは、アウトカムの維持、インパクトの両方の観点から効果が見いだされた。具体的には、心理教育プログラムで学んだ知識やスキルは、後の実生活においてもその実践は維持されていた。また、ひとりの養育者に対する心理教育が、子ども数の多さ、近隣との結びつきの強さという現地に特徴的な社会文化的背景によって、より多くの子ども達へとその効果が波及していた。これらの背景には、以下のこのプログラムの特徴があると推測される。まず一つは、アクションリサーチを用いてニーズ調査からプログラムの立案・形成的評価を毎年行い、現地の社会文化的背景に即したものになるよう協働してきたこと。もう一つは、現地の資源を活用するという視点から、就学前教育施設のスタッフと連携しながら、非専門家がプログラムの運営を行ったこと。さらには、子どもの養育環境の質の向

上を目指し、養育者の直接的ニーズを満たす行動形成に主眼を置いた分かりやすいアプローチを採用したことである。ECD の世界的潮流により、就学前教育が義務教育化される国も出てきている中、そうした行政組織あるいは草の根で教育支援を行う NGO 等の組織と協働することによって、子どもの心の育ちの支援を充実させることができるだろう。とりわけ、子どもに直接的に働きかける教育だけでなく養育者に働きかけるこうした心理教育は、必ずしも大規模な予算や専門家を必要しないため、途上国支援では有用だろう。

一方で、子どもへの関わりという行動形成に主眼を置いた本研究のアプローチという点で、課題も見いだされた。即ち、行動というアウトカムの維持は見出された一方で、子どもの内面に思いを馳せるところまでは至らなかったことである。子どもの意図や感情などの内的状態を推測する養育者の内省機能は、乳幼児期の子どもの社会情緒的発達の基盤となる親子の関係性を適正化していく重要な機能として、近年注目されている。ここに、非専門家による運営の限界があり、臨床心理士等心の専門家が貢献できる可能性があるといえる。即ち、非専門家が行動形成だけでなく、その背景にある子どもの内面と親の内面をも同時に扱えるように、専門家による援助が可能であれば、より豊かな支援となり得るのではないだろうか。非専門家によっても実践が可能となる親の内省機能を高める心理教育プログラムの開発と臨床心理士の役割について検討することが課題である。

5. 主な発表論文等

[雑誌論文] (計 5 件)

1. 富田貴代子・青木紀久代・太田沙緒梨 2011 途上国における Early Childhood Development プログラムの効果—教師から見た子どもの社会的情緒面での学校適応— コミュニティ心理学研究, 査読有, 14(2), 115-131.

2. 富田貴代子・青木紀久代・太田沙緒梨 2010 途上国における Early Childhood Development の実践—発達のアセスメントを生かす— 心理臨床学研究, 査読有, 28(4), 479-489.

他 3 件

[学会発表] (計 7 件)

1. 太田沙緒梨・青木紀久代・富田貴代子・宮田真利子 2012 アジア貧困地域での生活に根付いた子育て支援の方略(2)—協働的アセスメントを活かす— 日本心理臨床学会第 31 回秋季大会(確定), 2012 年 9 月 14-16 日, 愛知学院大学.

2. Ota, S., Aoki, K. & Tomita, K. The effects of early childhood development program in the Philippines(1). 13th Biennial Conference of the Society for Community Research and Action, 2011 年 6 月 17 日, Roosevelt University (Chicago, USA)

3. Tomita, K., Aoki, K. & Ota, S. The effects of early childhood development program in the Philippines(2). 13th Biennial Conference of the Society for Community Research and Action, 2011 年 6 月 17 日, Roosevelt University (Chicago, USA)

他 4 件

[図書] (計 3 件)

1. 太田沙緒梨 2012 思春期の心理 実践・発達心理学 (株)みらい 124-137.

2. 太田沙緒梨 2011 心理教育 心理臨床学事典 丸善出版 500-501.

3. 太田沙緒梨・青木紀久代 2010 親の心理教育 いっしょに考える家族支援—現場で役立つ乳幼児心理臨床— 明石書店 91-105.

6. 研究組織

(1)研究代表者

太田 沙緒梨 (OTA SAORI)

山梨英和大学・人間文化学部・非常勤講師

研究者番号：90440544